

じょうし みち き つと これ おこな かし みち き おお
上士は道を聞けば、勤めて之を行う。下士は道を聞けば、大いに
これ わら わら もつ みち な た じょうとく たに
之を笑う。笑わざれば、以て道と為すに足らず。上徳は谷のごと
こうとく た ごと けんとく おこた ごと たいき ばんせい
く、広徳は足らざるが若く、建徳は怠るが若し。大器は晩成し、
たいおん きせい たいしろう ぎょうな みち かく な な そ た みち
大音は希声、大象は形無し。道は隠れて名無し。夫れ唯だ道は、
よ か か よ な
善く貸し、且つ善く成す。

【大体の意味内容】すぐれた人物は、「道」の原理を聞けば勤勉にそれを実行しようとする。

くだらない輩は、「道」のことを聞くとそれをバカにして大笑いする。「道」とは支払い義務
は せ かせ は
を果たすためにせつせと稼ぐようなものではなく、むしろくだらない人間に大笑いされな
ければ、「道」の価値はないともいえる。高い徳とは、一見、低い谷間のように見える。広大
むへん とく いっけん た
無辺の徳のありさまは、一見、足りないところだらけのように見える。質実剛健な徳は、
いっけん み おお うつわ かんせい やみ
一見、ぐうたらであるかのように見える。大いなる器は、いつまでも完成しないが、闇そ
ものもののようにすべてを包み込む。大いなる音楽は、耳に聞こえず心に響く。大いなる象
こけいぶつ へんげんじざい てんこうきしろう あらわ みち さまざま げんしろう はいご かく
は固形物とはならず、変幻自在の天候気象として顕れる。「道」は様々な現象の背後に隠
れて、本来名づけようのないものである。そうではありながら、「道」はあらゆる事業に資金
か あた りっぱ じょうじゆ
を貸し与え、しかもそれらを立派に成就させるのだ。

「大器晩成」という有名な言葉が登場しました。通常私たちはこの言葉を「偉大な人物は、発達
は遅いけれども、のちに大成する」という意味で使いますが、『老子』原典をよく読むと、「すべてに
できあがってしまうものは『大器』ではなく、いつまでたってもできあがらないことが、『大器』の
証拠なのだ」ということがわかります。

「勤勉」であることは良いことには違いありませんが、「道」の本質からみれば、成果を急いで貯

蓄してゆへような感じになってしまうと、次第に本質からは遠ざかってしまうということなのでしょ。

「夫れ唯道は善く貧且つ善く成す」。一見何の役にも立たないようなことにも偉大な価値が潜

ており、そうした事業にも投資して成功させてゆへのが「道」の「陰徳(ごんてく)世間」には知られない善行

という事です。「費用対効果」を絶対の尺度として物事を仕分けしてしまう現代の風潮を、老子が見たらなんと思っでしやう。

そうか、「笑われれば、以て道と為すに足らず」か。バカにされ、あざ笑われるほどでなければ価値はないと。老子自身も、同じ時代の人々から言われ続けていたのかもしれないね。『道』が何の役に立つのか「金かけた分儲かるのか」などなぐ。そういうくだらない連中からバカにされた方が偉大なのだ、と。

「費用対効果」重視は現代だけの風潮ではなく、二千年前から続く人間社会の宿痾(あへまじ)長年続く病(びょう)なのでしやうね。